

村瀬次男・村瀬寿男

1. まえがき

ガンの正体は医学、生物学のわくの中では到底解明されるものではない。河川だ行 → エイジング → 進化 → ガン、これがガンの正体に至る唯一の道である。

2. 新だ行発生論＝はしこ形自励振動流説

バタフライのカタストロフィーの要因は次の通り。

バタフライの要因 $b/h - (b/h)_c$: 河川の流れの横断方向の不安定性 (安定ならゼロ)

偏位要因 σ : 乱流うずの step length の度数分布の偏り (偏りなしゼロ) 分裂要因 τ : 河床

洗掘の仕事率 (単位面積当り) 平常要因 I : 河川縦断面曲線のこう配 行動変数 x : 洗掘の河床形状の移動速度 (下流方向への移動を負とする)

3. 新老化説＝有機体－河床波等価説

エイジングのパラメータは次の通り。

$b/h - (b/h)_c$: エントロピー生成の流れの不安定性 σ : 有機体のメンバーの寿命の度数分布の偏り τ : 有機体のエネルギー代謝速度 I : マイナス束縛エネルギー・時間通減曲線 (エイジング曲線) のこう配 x : 有機体の I 上の移動ベクトル

ところで、 σ と I と x の区別を知つたことは極めて重要なことである。老化の本態は有機体の秩序の崩壊であるが、これには必ず σ の増大 ($\sigma \rightarrow 0$ と記す) を伴う。

4. 新進化論＝有機体体制変化説

進化の機構には自然選択の他に有機体の体制変化機構がある。(図-1) 進化は秩序の崩壊と秩序の再建とで一サイクルである。この間有機体の体制は2度変る。まず、老の体制から若返りの体制への転換が $\sigma \rightarrow 0$, $\sigma \neq 0$ によつて起こり、次に逆の転換が $\sigma \rightarrow 0$, $b/h - (b/h)_c = 0$ によつて起こる。前者の場合、進化の芽 (正の選択にかかる変異体) はいつも生まれる保障はない。生まれないときは有機体の絶滅である。

さて、進化には次の3種類がある。

大進化①+①' ~ この場合有機体は分裂し、進化の外因は有機体を死傷させるもの。選択は有機体に働く。 高進化②+②' ~ この場合有機体は融合し、進化の外因はエントロピー生成の流れの漸減である。選択は有機体に働く。 小進化③+③' ~ この場合有機体は分裂も融合もしない。進化の外因は τ の増大をもたらすもの。選択は有機体のメンバーに働く。

上の3種の進化の絶妙な継投でヒトが誕生したのである。(表-1) 新進化論はカルノー+ダーウインの進化論である。

5. 新発ガン説＝体細胞進化さ折説

発ガンは有機体としての細胞の体制変化であり、DNA の変化は発ガンの修飾現象に過ぎない。ガン細胞の自律増殖は、正の選択環境にありながら進化の芽が存在せず (細胞性免疫により異物性の強い変異体は除かれる)、選択が空転しているからである。

脱ガンは上の足踏の進化を完遂させてやればよい。具体的な手順は次の通り。

1) ガン患者の正常細胞を取り出す。 2) これに放射線をかけ、進化の芽をつくる。 3) 進化の芽を患者のガン組織の中に植え込む。 4) ガン組織に放射線をかける。 5) ガンは消滅する。(進化完了のガン細胞は異物性が強いので免疫が残らず退治してくれる)

極くまれな出来事として、放射線治療中の自然治癒の報告がある。これは進化の芽がガン組織の中に偶然生まれ進化が起つたためであろう。

表-1

	進化のステップ	進化の種類	進化の外因	備考
生命の誕生	非生物起源たん白質 (単一酵素反応系)			有機体の誕生, 免疫の起源
	多酵素反応系・ 細胞小器官レベル の生命	高進化②+③ 小進化②+③	原始スープの減少 太陽放射 大気中 O_2 の増大	有機体進化の始まり 大気組成の変化のため 光合成細菌, DNA の発明 ミトコンドリア
	細胞の誕生	高進化②+③	酵素の不足	真核細胞の出現
生物の進化	単細胞の集合体	高進化②+③	えさの不足	海へのCaの流入のため
	器官レベルの生物	小進化③+③	海中イオンの増大	ホルモン分泌生物の出現
	多細胞生物の誕生	高進化②+③	ホルモンの不足	
	カンブリア紀の海生 無脊椎動物の発達	大進化①	海水のNaの増大	Ca 骨格動物の出現 (Ca は対Na かつ抗物質)
	脊椎動物の上陸	大進化①	同上	
	は虫類の発達 ヒトの出現	大進化① 同 ①	地球の寒冷化 同上	恐りゆうの絶滅, は乳類の出現 頭脳の誕生 (石器を使う)
人間の社進 会化	部落の誕生	小進化②+③	火の使用	道具の生産, 言語の発明
	人間社会の誕生	高進化②+③	道具の不足	

